

令和元年9月8日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02734

研究課題名(和文) 地域社会における社会構造の変容と言語変化に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Research on Transformation of Social Structure and Language Change in Local Communities

研究代表者

木川 行央 (KIGAWA, YUKIO)

神田外語大学・言語科学研究科・教授

研究者番号：50327186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：地域社会における方言の変容を、40年前の言語地理学的な調査の結果および談話資料と、現在の言語地理学的調査の結果および談話資料とを比較することによって、実証的に明らかにした。調査地域は静岡県の安倍川流域と大井川流域である。その結果、語彙の面では方言形が使われなくなり、共通語化が進んでいること、また方言形の分布域は以前とほとんど変わっていないこと等が分かった。一方文法面については、使われなくなった形式もあるが、方言形が依然強い勢力を持つことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

方言の変化を実際の時間が経過した後の変化を言語地理学的研究と談話資料によって実証的に明らかにした点に意義がある。特に、意識を問う言語地理学的調査の結果と、意識せず方言を用いる談話資料の結果をあわせてみることで、多元的に観察することができる。また、調査地点は、日本の東西方言の境界地域である静岡であり、東日本方言と西日本方言の影響の有無、またこの地域独自の変化を認めることができた。

研究成果の概要(英文)：Revealing the change of dialects in the community, empirically, by comparing the results of linguistic geographical research and natural conversation data 40 years ago with the results of current data did. The study areas are the Abe River Basin and the Oi River Basin in Shizuoka Prefecture. As a result, it was found that the dialect forms were not used, and that standardization is in progress, and that the distribution area of dialect forms were almost the same as before. On the other hand, grammatical forms of dialect are still frequently used, although some forms are no longer used.

研究分野：日本語学

キーワード：言語変化 言語地理学 談話資料 静岡方言

1. 研究開始当初の背景

今回対象とする静岡県の安倍川・大井川流域は、1974年～1981年にかけて、静岡大学方言研究会によって言語地理学的調査が実施されている。また、1979年度～1981年度にかけて、文化庁の各地方言緊急調査によって、安倍川流域などで自然談話の収録が行われている。さらに、3. にあげる調査の結果によって、隣接する大井川流域の現在の状況も把握できる。このように、時間的・空間的に比較する資料がそろっている。

2. 研究の目的

対象地域における言語調査の結果を過去及び隣接地域の調査結果と比較することによって、時間の経過を経た後に、いかに変化し、また変化しなかったかを検証することを目的とする。

3. 研究の方法

大井川流域の言語地理学的調査は、木川が2011年度～2015年度にかけての科研費研究「方言分布変化の詳細解明－変動実態の把握と理論の検証・構築－」(研究代表者：大西拓一郎国立国語研究所教授)の研究分担者として、調査しているので、今回は主として安倍川流域において言語地理学的調査を行った。この結果を上記の先行研究の結果と比較し、変化について考察した。

また、静岡市足久保で自然談話を収録し、これを1. であげた談話資料(今回調査した地点と同じ地域での資料)と比較することで、自然談話で確認できる言語変化を見た。

4. 研究成果

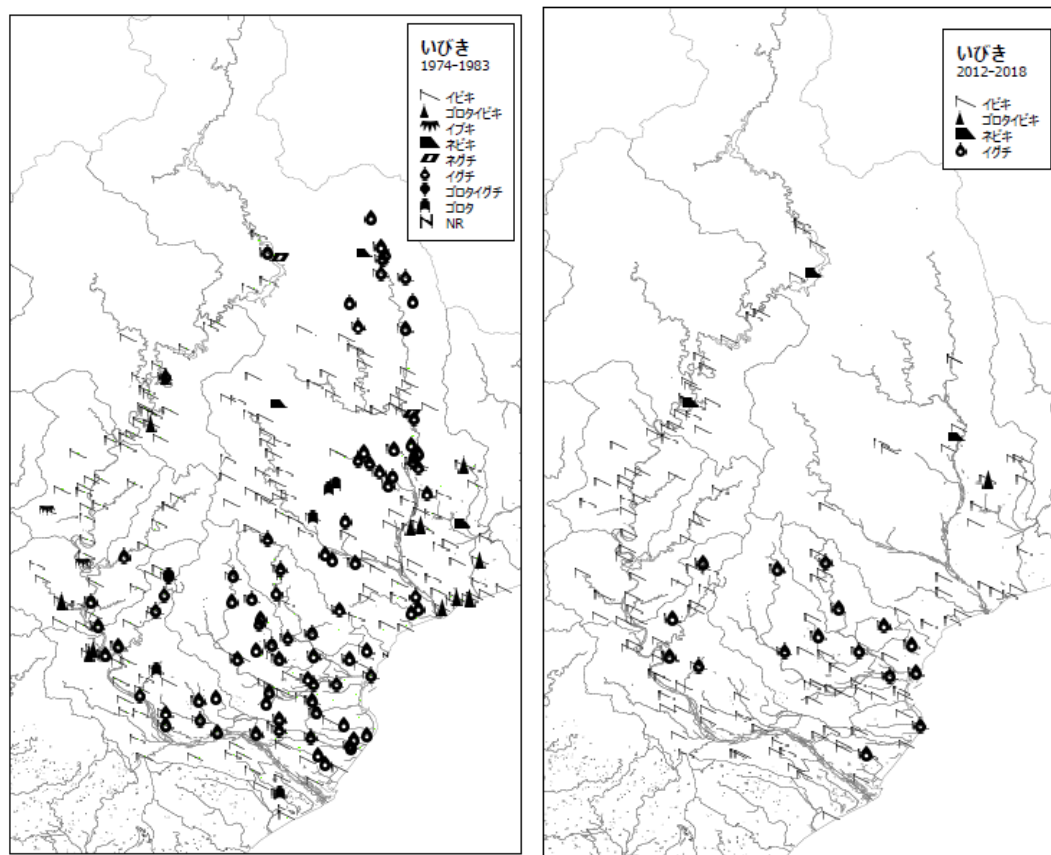
(1) 言語地理学的研究

まず、言語地理学的調査の結果としては、全国的に共通語化が進んでいるが、当該地域も例外ではないということが言える。例えば、「いびき」を表す語は、図1および図2で分かるように、40年前には安倍川・大井川の下流域を中心にイグチが広く分布し、さらにゴロタなどの語形があった。それが、今回の調査では、回答された語の種類が減り、また多く見られたイグチも回答があった地点は少なくなっている。また、イグチは文化的中心であるそれぞれの川の下流域に分布しており、これまでの言語地理学的な知見から言えば、上流域に分布を広げると考えられるが、実際には、上流域への伝播はないと言っても良い。そして共通語と同じイビキの単独回答の地点が増えている。この他にも「竹馬」を表す語形がかつては、上流にアシタカ・タカアシ、安倍川の支流である藁科川や大井川の中流にはユキアシ、安倍川の中流域にはアシダ、安倍川・大井川下流域にはサギアシ系の語が分布していたのが、今回の調査ではほぼタケウマないシタケンマになっている。このように、共通語形が多く使用されるようになり、またかつて存在していた語形が少なくなっている。同様の例はこれ以外にも多く見られる。

これに対し、文法項目は若干異なる。例えば、静岡方言の代表的な形式として推量を表すズラがある。この形式は、名詞および名詞相当の語に接続する。図3は「あれは先生だろう」の「だろう」に当たる部分の形式を示したものである。まず、多く見られるズラは、40年前もまた今

図1 いびき (1974-1983年調査)

図2 いびき (2012-2018年調査)



回の調査でも同様に多くの地点で用いられている。その点では、以前と変わらない。

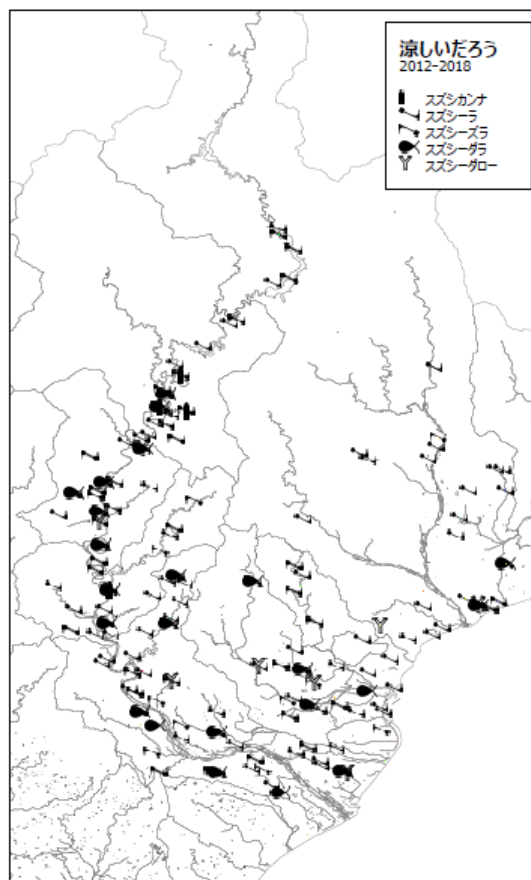
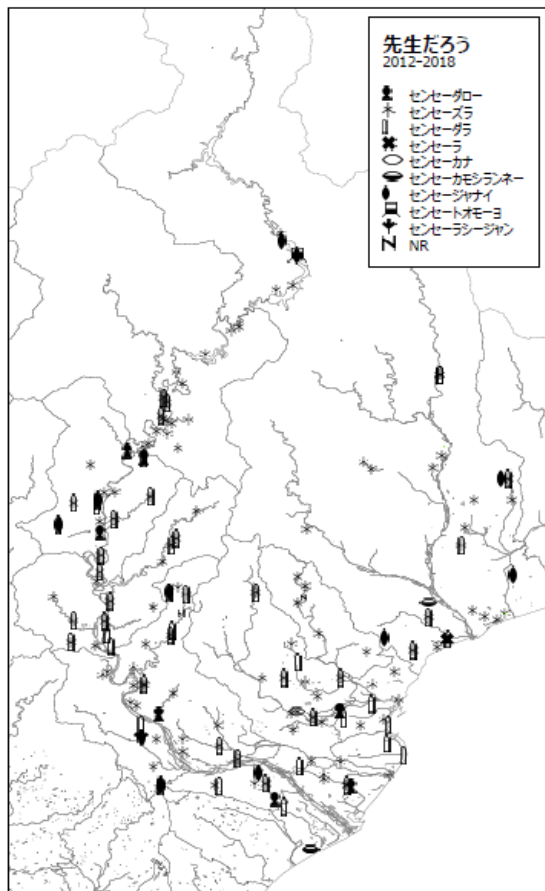
しかし、それと同時に今回の調査では、40年前にはあまり見られなかったダラが多く見られる。この形式は愛知県東部などに見られた形式であるが、この地域でも勢力を伸ばしている。これを西部の影響と考えるか、それとも名詞に指定の助動詞ダが後接し、さらに推量を表すラが後接した、すなわち、ズラから分析的な表現として発生したものか判断は難しいが、いずれにせよ共通語とは異なる方言形が勢力を伸ばしている姿であるとみることができる。アシタワ ハレルラ (明日は晴れるだろう) のようなラは若年層でも広く用いられる形式であり、推量を表す形式自体は、日常生活においては共通語化していないが、かつてはほとんど用いられなかったかつ共通語でもない表現が用いられるようになりつつあるということである。

形容詞の推量においても、かつてはスズシカンナ・スズシカラズ (涼しいだろう) のようなカリ活用系の形式が用いられていたが、現在ではほとんど用いられなくなり、スズシーラ・スズシーズラ・スズシーダラ (ズラおよびダラは「涼しいのだろう」を表す表現と考えられる) のようにラを用いた形式に限られつつある (図4)。

カリ活用系の形式が用いられなくなっているというのは、形容詞の過去を表す表現でも見られる。かつては「面白かった」を表す表現としてオモシロカッケがあったが、現在ではほとんどなくなっている。

図3 「先生だろ」(2012-2018年調査)

図4 「涼いだろ」(2012-2014年調査)



また、動詞的述語の過去を表す表現としては、かつてアッケ (あった)、イケ (いた)、ヨンゲ (読んだ) のように動詞的述語の連用形・音便形にケが後接する表現が見られた。しかしこのような表現は少なくなり、アッタッケ、イタッケ、ヨンダッケのようにタッケで過去を表す (東京方言のように回想などの意味を持たない、過去としての用法) ことが多くなっている。(2)を参照)

このように、文法面では共通語化ではなく、新しい方言形への変化あるいは従来様々なバリエーションがあったものが、次第にバリエーションがなくなり、単純化しつつあるという変化が見られる。

(2) 談話資料分析

談話資料による分析の結果の一部を以下に示す。ここで取り上げるのは、過去を表す表現である。なお、分析に際しては焼津市の過去表現を扱った中田敏夫 1979 を参照する。

(1) で見たように、動詞的述語にケが後接し過去を表す表現はほとんど見られなくなる。ただし、話し手の心的態度を反映した用法に限り使われることがある。以下のような場合である。

(i) ある動作・状態が実現したことに対して詠嘆的に表わす

▲サンガワラッテ イケンナ アレ、「●ガ ゼンブゴッツォクツチャッタ」ッテ (笑)。(▲

さんが笑って、いたけどな、あれ、「●が全部ご馳走を食べてしまった」って。）

これは、子どもの頃の思い出話をしたものである。動詞「いる」連用形に「ケ」が接続して表されている。なお、他方言との比較の上で、以下のような表現でも同様の表現が見られる可能性はあるが、今回の談話には現れなかった。

(ii)ある存在・状態に対して、今気付いたことを表わす

(iii)過去において既に確定していた未来の事柄に気付いたことを表わす

(iv)過去から現在にわたる存在や習慣などを確認することを表す

(v)ある決まりきった動作・状態を確認することを表わす

(vi)ある動作・状態が実際には実現しなかったが、実現したものとして仮想して表わす

これらはある特別な場面において出現する表現であり、その意味で、「自然談話資料」からは得にくい表現だったと考えるべきであろう。したがって、この表現が喪失したとは判断できない。

形容詞・名詞的述語には上記のようにケが「過去」を表わす場合、話し手の心的態度を表わす場合のそれぞれに使われる。ただし上にあげたカリ活用系のカッケは、40年前も見られない。

オヨゲネーナンテヒト イナイッケナ。(まあ、泳げないなんていう人はいなかったな。)

コドモノコロワ アノ、テレビワ ネーッケナ。(子どもの頃は、あの、テレビはなかったな。)

モトモト コノブラクワ イツモ イッショダッケンナ。(元々、この部落はいつも一緒だったけどな。)

以上からこの用法については40年後も引き継がれていると言えよう。

タッケが動詞的述語に後接して、テンス性・ムード性を示すと言う用法は現在も用いられる。

トイレデ。ソレ ヒトリデ ナガレテッチャ。アノ、ホレ、アレ クミトリニ キテクレタツケ ナンダツケ (トイレで。それ一人で、流れていって、あの、ほら、あれ、汲み取りに来てくれたっけ、なんだっけ、)

この動詞的述語にタッケが後接した表現は非常に多い。

また、「ゴメンケ」などの特殊な用法も、他方言の状況から見て、用いられる可能性があるが、今回の調査ではみられなかった。これは極めて口頭語的な挨拶語であるため、自然談話の今回の調査ではみられなかったものと思われる。

以上のように、40年経過した現在でも、新しい言語変容が大きく見られるわけではない、という指摘ができたと思われる。ただし、そんな中でも次のような例が見られる。

デンワダッタッテ ウレシガッタッケン デンワドコロカ モ、ダ ケータイニナッチャッテナ。ポケベルダナ ダッケン。(電話だっても、うれしがったけど、電話どころか、もう、携帯になってしまってたな。ポケベルだな、(ポケベル) だったけど。)

ココト オクナガノホーダケガ ヤザワモ ハヤカッタデナ。(ここと、奥長島の方だけが、谷沢も早かったからな。)

これまでの方言社会では、上の例では「デンワダッケ」、下の例では「ハヤイケ」となることである。このように共通語と同様の「タ」が現れるところに共通語化の側面が見られること

も確認しておく必要がある。現在の青年層の実態がどうなっているかも興味深いところである。

(3) おわりに

以上見てきたように、本研究において当該地域における言語変化の一端を明確にすることができた。この結果を基に、さらに分析を進めていきたい。また、安倍川中上流域の言語地理学的な調査の補完、この地域の若年層のことばの調査などが今後の課題となろう。

<引用文献>

中田敏夫 1979 「静岡県焼津市方言の過去表現」(『日本語研究』2, 122-129)

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)

- ① 木川行央 2017 「静岡方言から見た信州方言」『学海』,3,17-29
- ② 木川行央 2017 「大井川流域における言語変化ー30年前の調査結果との比較から」『空間と時間の中の方言ーことばの変化は方言地図にどう現れるか』,朝倉書店,176-204
- ③ 木川行央 2018 「静岡県大井川上流井川のことば-特徴とその現状-」『日本学』,37(7),36-45
- ④ 木川行央 2018 「大井川流域における文法形式の変化」『國學院雑誌』,119(11),181-192

(学会発表)

発表なし

(産業財産権)

該当なし

(その他)

該当なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：中田敏夫

ローマ字氏名 Nakada Toshio

所属研究機関名：愛知教育大学

部局名：その他部局

職名：理事・副学長

研究者番号：60145646